

その屋敷はなだらかな坂の上、豊かに生い茂る杉林の中にあつた。

近隣の住人はそこが「勾坂男爵様のお屋敷」と知っているが、たまさか訪れた人は草木の茂る公園、あるいは奥に靈験あらたかな神社仏閣が隠されているのでは……と勘違いするらしい。元から勾坂家を訪問するという目的で足を向けていなければ、神足も同様に思ったに違いない。ふと、神足が視線を落とすと、何やら黒い塊が地面をもそもそと蠢いている。蟻の集団だった。ひっくり返った 蝸の死骸を巢に運ぼうとしているらしい。

生き物は他の生き物や植物を食べ、やがて別の生き物の食糧、あるいは地の養分となる。死と生が循環しているのだ。それが無いのは人間だけだ。

人の死は他につながらない。そこに至るいきさつはどうであれ、死はただの死でしかない。人は文明や技術を残すではないかと言う輩もいるが、他の生き物たちは生き延びる必要最低限の狩りしか行わない。食糧でもない同族を、過剰な欲望や嫉妬というどす黒い感情の赴くまま、もしくは意味もなく殺めたりしないものだ。

じりじりと動く小さな昆虫たちの営みを横目に、神足は勾坂家へと向かった。正面玄関への導入路を見つめるべく、塀沿いの道を行く。

ほどなく、うつそうと茂っていた杉がまばらになり、整然と両脇に並ぶ砂利道が現れた。その先に白い洋館が建っている。暗く影を落とす杉木立のカーテンが開き、まばゆい陽の光を放っているかのように神足には見えた。

足の裏に砂利を感じながら、光射す屋敷へ歩を進める。途中、木立の中で芦毛の馬を引いている男の姿が神足の視界の端に映った。

白いシャツを羽織り、長靴を履いた背の高い男だった。歳は神足よりもやや上……三十半ばあたりだろうか。乱れた髪に無精ひげという風貌からして、厩舎の使用人に違いない。

玄関はすぐそこである。あえて声をかけることもない、と神足は足を速めた。短い階段を上って鳴らした呼び鈴に応え、すぐに扉が開いた。黒い燕尾服に身を包んだ四十代と思しき男がいた。ほっそりとしており、頭髪をきれいに撫でつけている。

夜会の予定でもあるのだろうか……と思いつつ、神足は中折れ帽子を軽く上げた。

「本日、約束をしている神足です」

男はうなずき、「どうぞ」と扉を引きながら数歩下がった。

「失礼」

玄関広間のひんやりとした床は大理石だろう。そびえ立つ二本の白い円柱が梁を支え、二階

へと伸びる中央階段の踊り場のステンドグラスからは光が舞い込み、来賓を柔らかに歓迎する。だが不思議なことに「異国に迷い込んだ」という感覚はなかった。様式は西欧風でも、そこかしこに見受けられる精緻な意匠が職人仕事だとわかるせいかもしれない。

「加瀬經由で依頼をいただきましたが……どなたを通じて？」

名刺を上着のポケットから出し、丁寧な態度で円柱の奥へ案内する燕尾服の背中に声をかける。すると男はちらりと顔を向け、そっけなく言った。

「詳しい話は旦那様にお尋ねください」

その返答で、神足は男が使用人、恐らくはこの家の執事だと気づいた。

「こちらでお待ちを」

通されたのは、丸天井の広々とした部屋だった。壁は書籍がぎっしり詰まった本棚で覆われ、暖炉の上には洋画の風景画が掛かっている。書斎というよりは、サロンを兼ねた図書室に近い。

刺繍が施された布を張った長椅子、あめ色に磨かれたマホガニーの書き物机、偉人を象つたらしき彫像、鮮やかな伊万里の大壺、淡い光を放つランプ……歴史と文化、知と美を凝縮したその空間は贅を尽くした調度品で埋め尽くされていたが、同時に使い込まれた温もりを感じられた。ここで長い時間を過ごした人々の息遣いが残っているのだ。

魅入られたかのように、神足は視線で暖炉に施された意匠、指先で椅子の布の感触を確かめた。

ところがよく見ると暖炉にはそここに小さな亀裂が入っており、椅子の布も端が擦り切れている。よく整えられ、清掃も行き届いているが、傷みは隠せない。

「外側はどうにか取り繕っているが、中の補修までは手が回らない」

すつと突き抜ける刀のような、張りのある声に、神足は振り返った。そこにいたのは、馬の手綱を引いていた男だった。

「……男爵は正直なお方ですね」

「取り繕っても仕方ないだろう」

神足は帽子を取り、軽く会釈した。

「初めてお目にかかります。神足 巽です」

男は「句坂志重だ」と言い放ち、神足の横をすり抜けて書き物机の前まで歩いていった。そして、そばにあるひとり掛けの椅子にどっかりと腰を下ろし、汚れた長靴の足を組んだ。

「どなたから私の話を——」

「それはいい。かけてくれ。捜してほしいものがある」

若き当主は神足の問いを遮り、単刀直入に言った。

句坂家は堂上華族、つまり元は公家である。しかし現当主、志重の母親は士族の出身。侍の血も受け継いでいるのだ。

「内容次第です」

神足が男を使用人だと思ひ込んだのは、服装のせいだけではない。男爵家の当主にしては予想以上に若かったからだ。もちろん実際に若くは若い男爵がいてもおかしくはなく、髪に白いものが交じり始めた老体だというのは勝手な先入観なのだが。

「調査費用はある。それに、君の腕を信頼している」

誤解のもうひとつの理由は、匂坂の容姿にあつた。逞しい体軀とやや癖のある黒髪の持ち主で、間近に見る顔立ちとは異国の血が混じっているのではないかと思うほど彫りが深い。といつても、異国とは欧米ではなかつた。落ち窪んだ眼窩と漆黒の瞳が同じアジアの別の国の男を想起させ、精悍でありながら粗野な空気が醸し出している。

その一方で、物怖じせず相手を凝視するような不遜さは、やはり育ちのよさから来るものだとも思う。血筋のいい暴れ馬とでもいおうか、乱暴な言動でも品位が落ちないのだ。

こういう男を、神足は幾度か見かけたことがある。だがそれは酒とドブの臭いが混じりあう場末のバーや、娼婦とチンピラがたむろする汚れた裏通りで、少なくとも知と美に満ちた書齋ではなかつた。

神足は場末のバーや裏通りに佇む匂坂を想像してみる。かけ離れている、とは思わなかつた。底辺で生きようと蠢く本能と彼の暗く熱っぽいまなざしには、確かに共通点がある。

だが、匂坂は明らかに、この場にいることを運命づけられた男だつた。布が擦り切れた椅子も彼が座れば玉座になり、朽ちかけた屋敷は城になる。たとえ時代が王を見放し、追い抜いてゆくとしても。

「素性もご存じなのには？」

神足はそばの椅子に腰を下ろし、聞いた。

「君は我が家の財政状況に気づいた」

女中が紅茶を運んできた。やや離れた場所に座っていたので、女中は少し迷つた挙句、客人である神足のそばのテーブルにポットやカップを置いた。それから紅茶を注ぎ、神足、匂坂の順にカップを手渡した。

「探偵でなくとも、詮索好きなら想像はつきます」

神足は熱い紅茶に口をつけ、続ける。

「それにあなたが納得しても、あの執事が納得するかどうか……」

匂坂は視線を神足の後方へとずらし、声を張つた。

「五十嵐、大店の番頭だと思われているぞ」

出ていく女中とすれ違ふようにして、五十嵐と呼ばれた執事が入つてきた。